

松本ゼミ課外学習～特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」（東京国立博物館）をみて

国際日本学部 日本文化学科3年 手塚美里

東京国立博物館は、明治5年に東京・湯島聖堂大成殿で開催された博覧会によって発足した、日本で最も長い歴史を持つ博物館である。日本を中心とした東洋の様々な国や文化の美術品、歴史資料、考古遺物などを収集、保存している。現在の収蔵品は約12万件になり、なかには日本最大のコレクションを誇る89件の国宝も所蔵している。

そして今年、創立150年という大きな節目を迎え、特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」（10月18日～12月18日）が開催された。タイトル通りこの特別展は、150年で収集された東京国立博物館の国宝を全て公開している。東京国立博物館が所蔵している国宝を一度に全て公開するのは、今回が初めてとなる。東京国立博物館150年の集大成ともいえる特別展。私もこの貴重な特別展にゼミの仲間と足を運ぶことができた。

黒をベースとした展示会場に佇む国宝の数々は、まさに圧巻だった。どの国宝も魅力を最大限に味わせるよう、シンプルでありながらも様々な工夫をして展示されており、一点ずつ足を止め見入ってしまう美しさがあった。

どの資料も素晴らしかったが、知っている資料を前にした時は胸が高鳴った。「秋冬山水図」や「檜図屏風」、「埴輪 挂甲の武人」、「古今和歌集」、「八

橋蒔絵螺鈿硯箱」…… 今まで教科書で学んできた国宝が目の前にある！ そう考えると思わず、「教科書で見たあれだ！」と顔を合わせて、仲間と感動した。実物を間近で見ることの感動は、その資料に関する知識を持たなくても味わうことができる。しかし、資料に関する知識を持つて実物を見たとき、その感動は計り知れない。展示を楽しむ中で「細事法華経」や「竹斎読書図」、「灌頂



激戦チケットを入手して、これから東京国立博物館・平成館へ

幡」など、初めて知る国宝に「こんな資料もあったのか」と新たな興味を持つ反面、見た瞬間に「ああ、これは！」となれず、「目の前に実物があるのに、なんだか勿体ない！」と感じる場面もあった。

東京国立博物館の特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」を通して、実物を間近で見ることの感動を味わい、同時に学ぶことの楽しさも感じた。五感を使い、自由に資料を楽しむことができる、それが博物館の醍醐味だと思う。今まで、日々の大学での学びとは違う形で文化や歴史に触れたいと思い、博物館を訪れていた。今回、国宝という大学の学びでよく目にするが、実際に見る機会は殆どない資料を間近で見学し、大学での学びと博物館の展示を結び付ける楽しさを知ることができた。学んでいることが、また博物館を訪れたときの感動につながるかもしれない…… そう考えると日常の講義や読書が楽しくなり、もっと多くのことを知りたいと思うようになった。

次は、サントリー美術館「京都・智積院の名宝」展で智積院の貴重な資料を見学する予定だ。見学に向けて、少し苦手だった日本史の教科書をもう一度、開いてみようと思う。